

生涯研修プログラム

2. クリニカルカンファランス

7) 婦人科画像診断の特異性

③ 経膈法を中心に

日本医科大学教授 石 原 楷 輔

婦人科診療における経膈超音波検査の有用性については今さら解説するまでもない。現在、外来に経膈超音波診断装置をもたぬ施設はなく骨盤内疾患のほとんどは経腹超音波より本法で診断される頻度ははるかに高い。数年前まで経膈超音波検査の対象は、妊娠初期の胎芽・胎児の観察、子宮筋腫、卵巣腫瘍の診断や卵胞モニタリングに限定されたものであった。最近はSonohysterographyによる子宮腔内病変の観察など婦人科診療における活用範囲は拡大し、さらにカラードブラ、3次元画像表示などが出現し、その有用性は一層クローズアップされてきた。今日、産婦人科医を標榜する医師は本法の操作技術を習得し、画像の読影に習熟することが必須であるといつて過言でな

い。

このような現状を踏まえ、本セッションでは婦人科診療における経膈超音波診断を主体に、まず、日常診療でしばしば遭遇する子宮筋腫、子宮内膜症、卵巣腫瘍、絨毛性疾患等の読影ポイントを、ついで更年期周辺や閉経期における本法の活用について述べる。またSonohysterographyによる子宮腔内病変—内膜増殖症、内膜ポリープ、粘膜下筋腫、内膜癌—の検索過程を解説し、日常診療での活用について述べる。さらに、将来への展望として、Sonohysterographyを併用した3次元画像の臨床応用への試みや、最近開発された経腹走査法用の新しい手法による広範囲画像表示装置の使用経験についても言及する